

わ せ だ 早稲田みょうがとみょうがたけ

早稲田みょうがは、江戸時代（えどじだい）のころから江戸（えど）の人々（たいてい）が大好き（だいすき）な食べ物（たべもの）でした。1804～1829年頃（ころ）に書かれた『新編武蔵風土記稿（しんぺんむさしふうどきこう）』という本（ほん）には、「早稲田みょうがは、牛込（うしごめ）の丙（うち）や、高田（たかだ）の近所（きんじょ）にあり、ほかの産地（さんち）に比べると大きくおいしいので、江戸（えど）で売（う）られているみょうがの多く（おほく）は、この辺り（あたり）から出荷（しゅっか）されている」というようなことが書かれています。

また、早稲田鶴巻町（わせたつるまきちょう）にある天祖神社（てんそじんじや）は、みょうが畑（はたけ）の神社（じんじや）と呼ばれていました。さらに、早稲田大学（わせただいがく）の正門（せいもん）の近く（ちかく）には、「早稲田みょうが」という記念碑（きねんひ）があり、そこには明治時代（めいじじだい）のみょうが畑（はたけ）の様子（ようす）が書かれています。

しかし、江戸（えど）から明治時代（めいじじだい）にあった早稲田みょうがの畑（はたけ）は、住宅（じゅうたく）に代わり、たくさん（た）の人が住み始め（すまひじめ）、時代（じだい）とともになくなってしまいました。

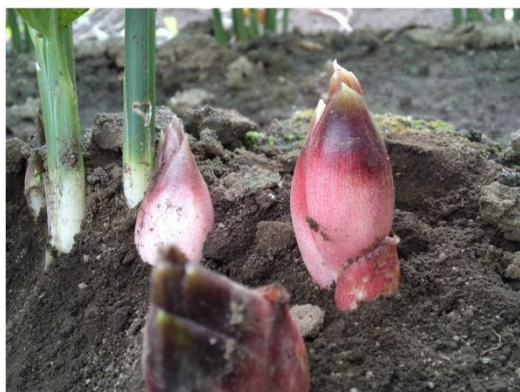
江戸時代（えどじだい）の野菜（やさい）を研究（けんきゅう）している大竹（おおたけ）さんは、ある日（あるひ）、もしかしたら昔（むかし）から早稲田（わせた）に住（す）んでいる家（いえ）の庭（にわ）に、早稲田みょうが（わせたみょうが）が見つかる（みつかる）のではないかと（おも）いました。それは、みょうがは種（たね）をまいて栽培（さいばい）するのではなく、地下茎（ちかけい）という根（ね）が自然（しぜん）に伸び（のび）て広（ひろ）がっていくもの（もの）だからです。

2010年（に）に早稲田大学（わせただいがく）に頼（たの）んで、「早稲田みょうが捜索隊（そうさくたい）」という学生（がくせい）など（など）による10数人（すうにん）のグループ（ぐるーぷ）を作り（つく）り、早稲田中（わせたじゅう）を歩（あ）き回（まわ）って捜（さが）しました。

すると、明治26年（めいじ26ねん）から早稲田（わせた）に住（す）んでいるという古い家（いえ）の庭（にわ）で見つかった（みつかった）のです。そのみょうがの根（ね）をいただき（いただき）、みょうがを栽培（さいばい）した事（こと）がある、練馬（ねりま）の井之口（いのくち）さんに頼（たの）んで、畑（はたけ）で栽培（さいばい）してもらいました。

栽培（さいばい）してから2年目（にねんめ）の9月（きゅうがつ）に、ぷっくらして赤（あか）い、独特（どくとく）の味（あじ）がする早稲田みょうがの「みょうがの子（こ）」が生（は）えてきました。さらに、井之口（いのくち）さんは、「みょうがたけ」の栽培（さいばい）に取り組（と）り組み（か）ました。江戸時代（えどじだい）には「みょうがたけ」というもの（もの）を徳川（とくがわ）の将軍（しょうぐん）も食（た）べていたそう（そう）なのです。みょうがの根（ね）を半地下（はんちか）の穴（あな）を掘（ほ）って植（う）えて、太陽（たいよう）の光（あ）が当た（あ）らないようにカーペット（かーぺっと）をかぶ（か）せて栽培（さいばい）すると、やわらかい黄色（きいろ）いみょうが（みょうが）が生（は）えてきます。これが「みょうがたけ」です。

今日の給食（きゅうのきよく）はこの「みょうがたけ」が入（い）っています。よくかむ（か）むと香（かお）りのあるみょうがの味（あじ）に気（き）づくと思（おも）います。新宿区（しんじゅく）の小学生（こがくせい）の皆（みな）さん（さん）には、この味（あじ）を忘（わす）れないでほ（ほ）しいです。



早稲田みょうがの「みょうがの子」



早稲田みょうがの「みょうがたけ」